IS 銀の姫とサーヴァント

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　銀の姫とサーヴァント

【Ｎコード】
Ｎ２５０８Ｚ

【作者名】
黒翼

【あらすじ】
銀の姫は幼き頃の白き騎士に救われた。
だが、無常にも別れが訪れてしまった。
そして、かつてとは変わり果てた世界で再開する。
※設定が甘かったり、チートだったりします。
それらが嫌な方はバックで。

プロローグ（前書き）

また始めてしまった……。

プロローグ

それはずっと昔のことだった。

「一緒に遊ぼうよ！」

「え？」

私は元々髪の色は違い、ブラウンだった。
しかし、あるとき突然髪の色が変色し、銀髪になってしまった。
その所為か、一緒に遊んでいた子達が奇妙がって私から離れていった。
だから、私は一人でいた。
そんな私に声を掛けてくれてのが彼だった。

「君も一緒に遊ぼうよ！」

「え、でも……」

「遊ぼう、ね？」

そんな私に明るい笑顔で話しかけてくれた。
私は嬉しかった。

「う、うん！」

一人だった私に、寂しかった私に声を掛けてくれた、彼が好きだった。

でも、私の両親は、あまりにも過保護だった。
幼稚園でこれだ、小学校ではもっと酷いかもしれない。
そういう考えを持ってしまったいたが故に、私と海外に移住することになった。
実家のあるドイツに行くことになってしまったのだ。

「一君……」

「ウリアちゃん、また会おうね！」

「う、うん、また……。　私のこと、忘れないでね……？」

「もちろん！　絶対に忘れない！」

「またね、一君。　お姉さんにも言っておいてね」

「うん！」

これが、私と彼の別れだった。

『世界で唯一のＩＳ操縦者・織斑一夏』

実家の城（誤字在らず）でテレビを見ていて、私『ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』は呆然とした。
祖父の命令でＩＳ学園に行くことが決まっていた私は運命を感じた。
彼の姉は一年ほどドイツ軍に来ていたため、再開したときは驚かれた。
彼女は私の立場に驚いた。
私は、ドイツのみならず、様々な国に大きなの権力を持つアインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの企業の企業代表操縦者になっていた。
元々、アインツベルンは貴族だった。
それ以外に、錬金術が使える。
私も使えるが、流石に治癒まではすることができない。

「一君、覚えているかな……」

『彼がウリアスフィールの言っていた人ですか』

「うん。　私の恩人で、私の初恋の相手。　今もそれは続いているんだけどね」

『写真で見る感じはいい男だな』

「幼稚園のころは凄く優しくて、明るい人だったよ」

『それは今でも変わらぬといいがな』

「きっと一君は今でもいい人だよ」

『そうであると願いましょう』

「うん。　早く会いたいな……」

私は、早くＩＳ学園に入学したい、早く一君に会いたい、そういった欲求が生まれてきた。

再開

「全員揃ってますねー。　それじゃあＳＨＲを始めますよー」

『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さを持っている。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

誰も答えません。

原因は、ここにいる唯一の男性で、私の初恋の相手の織斑一夏。

唯一の男性であるが故に、クラスの視線は全て彼に向けられている。

私も見ているんですけどね、だって一君とっても格好よくなってるんだもの。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。　えっと、出席番号順で」

あ、私ですね。

「ウリアスフィール・フォン・アインツベルンです。　よろしくお願いします」

私に気づいてくれるかな？

一君は今この空気に飲まれちゃってるから気づかないかな？

後で話しかければいいか

Ｓｉｄｅ～一夏～

キツイ、これは想像以上にキツイ！
男が俺だけってこれだけ視線を集めるものだな。

「……くん。　織斑一夏君っ」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で名前を呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。
案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。　お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。　だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、駄目かな？」

山田先生はぺこぺこと頭を下げる。
この人、本当に先生なのだろうか？

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。　絶対ですよ！」

俺の手をとり詰め寄る先生。
凄い注目されるんですけど……。
うわ、すっげー視線。

「えー……えっと、織斑一夏です。　よろしくお願いします」

『もっと喋ってよ』と言う空気が流れている。
だが、話すことが何も無い。
……しばらく考えたが何も無い。
助けを求めて幼馴染の箒を見るが、目をそらされた。
あ、あれ？
あの子、もしかして……。
いや、まさかな。
っと自己紹介の最中だったな。

「……以上です」

女子数名がずっこけるが、俺にとってはどうでもいい。
彼女があの子なのかが気になって仕方が無い。
む！　殺気！

パシッ！

この攻撃の鋭さ、間違いない！

「ほう、防ぐか」

黒スーツにタイトスカート、すらりとした長身、狼を思わせる鋭いつり目。
間違いない。
俺の実姉なのだが、職業不詳で月一、二回しか家に帰ってこないのだ。
だけどなんでここに？

「……やっぱり千冬姉だったか」

パシッ！

「織斑先生と呼べ。　馬鹿者」

もう一度出席簿が振り下ろされるが、それをも防ぐ。
俺だって鍛えているんだ、それがこんなところで役立つとは。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

俺は聞いた事のない優しい声だ。

「い、いえっ。　副担任としてこれくらいはしないと……」

山田先生は若干熱っぽくなった。
そっちの気があるわけではないよな？

「諸君、私が織斑千冬だ。　これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。　私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。　理解出来ない者は出来るまで指導してやる。　私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに鍛え抜くことだ。　逆らっても良いが、私の言う事は聞け、いいな」

なんという暴力発言。
教師有るまじき発言だと思うぞ、我が実姉織斑千冬よ。
……何のキャラだ、コレ？

「キャーーーーーー！　千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園から来たんです！　北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」
「私、お姉様の為なら死ねます！」

キャアキャア騒ぐ女子達を、千冬姉はうっとうしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者共が集まるものだ。　感心させられる。　それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

人気は買えないんだから、もうちょっと優しくしようぜ？

「きゃあああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」

このクラスは変態さんが多いのか？
ノーマルだよな？　ノーマルもいるといってくれ！

「で？　おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は――――」

パシッ！
本日3度目。
俺、止めてなかったらもう脳細胞が一万五千個死んでるぞ？

「織斑先生と呼べ」

「了解です、織斑先生」

俺と千冬姉が姉弟なのがばれた。

「え……？　織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で男で『ＩＳ』が使えるって言うのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなぁっ。　代わってほしいなぁっ」

最後のは放っておこう。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。　諸君らにはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。　その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。　いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんという鬼教官だ。

「席に着け、馬鹿者」

馬鹿で結構。

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～ウリア～

一夏、強くなってるみたい。
あの千冬さんの攻撃をああも防ぐなんて。
＞ますます惚れましたか？＜
＞うん。　写真で見るよりもずっと格好いいしね＜
＞その恋が実るといいな＜
＞うん。　覚えているかな？＜
あ、彼らはアインツベルンが創った私の専用機『サーヴァント』の人格たち。
アインツベルンが過去に召喚した英霊たちらしい。
神話に出てきた英霊たちの力を貸してもらうことができるのが、私のＩＳの強みなんだ。
キーンコーンカーンコーン。
あ、一時間目が終わった。
一君はダウンしていた。
大丈夫かな？
＞主よ、話しかけなくてもいいのか？＜
＞あ、そうだった＜
私は席を立ち、一君の席に行く。

「ちょっといいかな？」
私以外にもう一人、一君に話しかけようとしていた子がいたけど、
私は確かめずにはいられない。
「はい？　……！（ガタッ！）」
一君は私を見ると驚いて席を立った。
周りは何事かと見てるけど、気にしない。
「覚えてる……かな？」
「ウリア、なのか……？」
「うん。　久しぶりだね、一君」
「本当に、ウリア……なんだな？」
「そうだよ。　幼稚園のころに別れた、ウリアスフィール・フォン・
アインツベルンだよ」
「久しぶり、ウリア。　俺、ずっと覚えていたぞ。　ウリアと別れ
てから十年間、ずっと」
「うん……私もずっと忘れなかった……」
よかった、一君が私のことを覚えていてくれて……。
涙が出てきたよ。
「お、おい、どうした？」

「嬉しくて涙が……」

「そんなに嬉しいのか？　俺も嬉しいけど……」

だって私の好きな人なんだんもん！

覚えてもらえてて嬉しくないわけないでしょ！

＞おめでとうございます、ウリアスフィール＜

＞まだ早いぞ、アルトリアよ。　それはウリアの恋が実ってから言うべき台詞だとは思わないかね？＜

＞ほう、わかっているではないか＜

＞イスカンダル、私は鈍感であったが、それは過去の話だぞ。　それに、流石にそれくらいは俺でもわかる＜

＞一番新しい英霊が言うではないか＜

＞無駄な言い争いをするな。　我らは主に仕えるだけであろう＜

＞間違っているぞ、ディルムッドよ。　余は仕えてはおらぬ。　この契約は余たちの気分次第だ＜

＞イスカンダルの言うとおりだ。　現にギルガメッシュは現界しているが、力を貸すことは滅多にない＜

＞そういえばそうだったな＜

このＩＳに宿る英霊たちの中で最も強い力を持つギルガメッシュは、滅多なことがない（ていうか、二回くらいしか使ったことが無い）と力を貸してくれないから困る。
『我（オレ）の宝物をそう簡単に使おうとは片腹痛い』とか言うから、ギルガメッシュはほとんど使えず仕舞い。
人類最古の英雄王はいつになったら私にちゃんと力を貸してくれるのだろうか？

「これからもよろしくね、一君」

「ああ、よろしく。　あと、一夏でいいぞ」

「今はまだ一君のほうがいいからこのまま」

「そうか」

キーンコーンカーンコーン。

「時間みたいだから、また次の時間にね」

「おう」

私と一君の繋がりが切れて無くてよかった～。

再開（後書き）

「出した英霊たちは、なんとなくです。
後、原作読んでないから英霊たちの口調がわからない！」

「そんなので大丈夫なんでしょうか？」

「問題ないと信じている！」

「こんな駄作者ですが、応援してあげてくださいね」

「ウリアぁ！？」

設定（前書き）

一応投稿します。
が、設定が甘いです。

設定

【名前】
ウリアスフィール・フォン・アインツベルン

【見た目】
Ｆａｔｅのアイリとイリヤを足して二で割ったような感じ。
元々はブラウンの髪に赤い目だが、なぜか急に銀（白？）髪に変わった。

【設定】
幼稚園時代は日本にいたが、突然の髪色変化により起きた周囲の反応と、あまりにも過保護すぎた両親の所為でドイツに移住した。
アインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの持つ企業の企業代表でもある。
アインツベルンの秘奥である錬金術を覚えているが、治療術はまだできない。
一夏のことがずっと好きで、一途である。

【専用機名】
サーヴァント

【設定】
アインツベルンが創り上げたＩＳ。
アインツベルンが呼び出した英雄たちの霊『英霊』たちが宿り、その英霊の気分次第で力を貸すという、変わった性質を持つ変わったＩＳ。
元々のカラーは雪のような白で、英霊の使用した武器『宝具』も使えるが、真の力は使えない。

『宝具』の真の力を使うのは簡単で、英霊とＩＳを共有するすること（共有時はＩＳの格好が変化する）。
ただし、その英霊が拒めば使えない。
しかし、その中にもいろいろと例外が存在したりする。

【織斑一夏について】
一夏の戦闘能力は高く、剣道にて、箒では相手にならないほどに強い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2508z/

IS 銀の姫とサーヴァント

2011年12月10日18時49分発行